平成19年度秋季特別展
【第25回 平城京展】

並びたつ大塔

―大安寺塔跡の発掘調査―

2007年 11月5日(月)～12月26日(水)

奈良市埋蔵文化財調査センター
ARCHAEOLOGICAL RESEARCH CENTER , NARA CITY

開催にあたって

奈良市教育委員会では平成13年度から平成18年度にかけて史跡大安寺旧境内にある西塔跡、東塔跡の発掘調査を継続的に行い、多くの成果をあげることができました。現存しない上屋の構造はわかりませんが、基壇の構造や金色に輝く風鐸など多くの資料を得ることができました。

大安寺の塔は記録や基壇平面の大きさからみて七重塔と考えられています。同じく七重塔であった東大寺の東西塔に次ぐ規模であったようです。１つの寺院に２つの塔が並びたつようになるのは藤原京の本薬師寺（のちの平城京薬師寺）からのようですが、主要伽藍の南に塔院として独立するようになるのは大安寺からではなかったかといわれています。大安寺の伽藍配置はその後の寺院建築に大きな影響を及ぼしました。今回の展示で往時の壮大な伽藍に思いをはせていただければ幸いです。

なお、この度の展示を開催するにあたり、御協力頂いた関係機関各位に心より感謝申し上げます。

平成19年11月５日

奈良市教育委員会
教育長　中尾　勝二

例言

1　この冊子は、平成19年11月５日から12月26日まで奈良市埋蔵文化財調査センターで開催する秋季特別展（第25回平城京展）「並びたつ大塔――大安寺塔跡の発掘調査――」の解説パンフレットです。

2　独立行政法人奈良文化財研究所から出品、写真の提供を、国立歴史民俗博物館から写真の提供をうけました。記して感謝いたします。

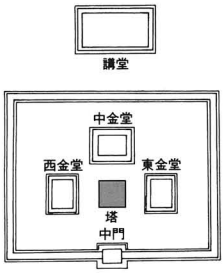
3　本書の編集、レイアウトは埋蔵文化財調査センター・奈良市教育委員会文化財課職員の協力のもとに、池田裕英がおこないました。

■　並びたつ塔

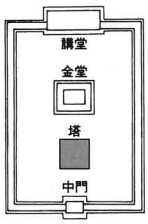
塔は寺院にとって最も重要な建物の一つです。塔はサンスクリット語のストゥーパ（stupa）の音訳で、ストゥーパは釈迦の遺骨（舎利）を埋葬したところです。それが中国で卒塔婆となり、塔婆となり、さらに略されて塔となったものです。ただし、ストゥーパと日本の仏塔とは形が異なり、直接結びつくものではなく、日本の木造塔の原型は中国に求められるようです。

日本の初期の寺院は、塔を伽藍の中央に配置していて（飛鳥寺や四天王寺）、塔が重視されていたことがわかります。その後、金堂と塔が並ぶようになります（法隆寺西院伽藍や川原寺）。

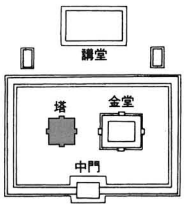
日本で２基の塔が並びたつ（双塔式）伽藍配置がみられるようになるのは７世紀末に藤原京に造営された本薬師寺（のちの平城京薬師寺）が最初と考えられています。そして、双塔が主要伽藍の南に塔院として独立するようになるのは大安寺からです。このような形の寺院には東大寺や西大寺があります。大安寺の伽藍配置はその後の寺院建築に大きな影響を及ぼしています。



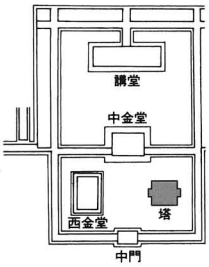
飛鳥寺



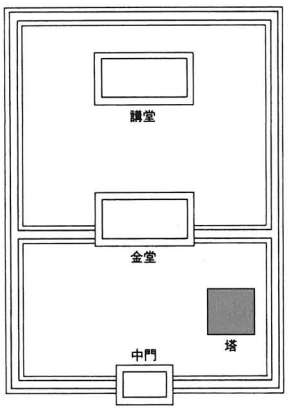
四天王寺



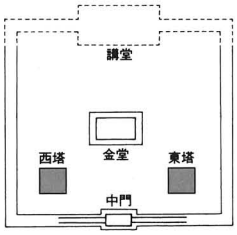
法隆寺西院伽藍



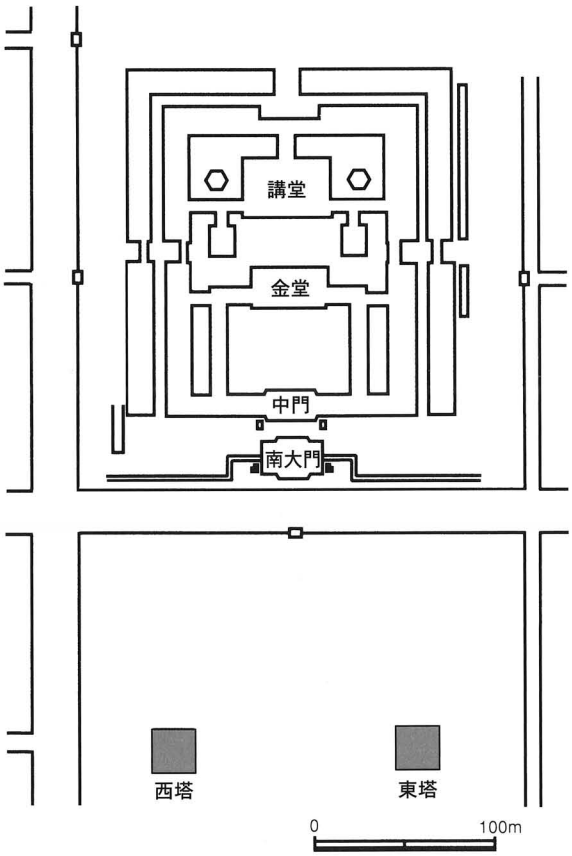
川原寺



文武朝大官大寺



本薬師寺



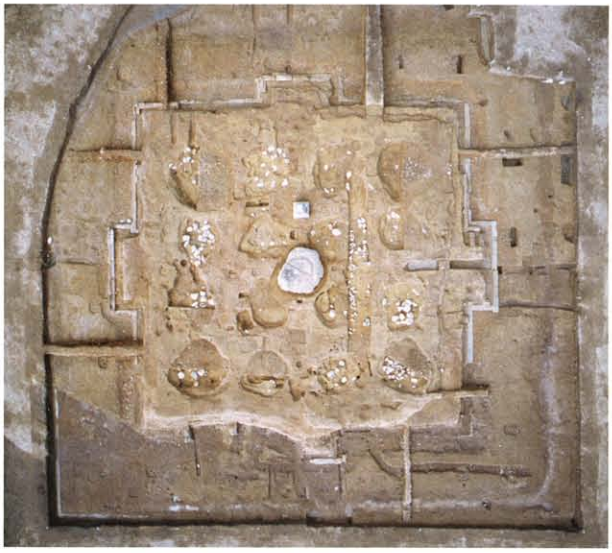
大安寺

伽藍配置模式図（『吉備池廃寺発掘調査報告』より作成　1/4,000）

■　大安寺塔跡の発掘調査

西塔跡の発掘調査

塔の平面規模は21mの正方形であることがわかりました。高さについてはわかりませんが、基壇の平面規模からみて記録どおり七重塔であったことは間違いないと考えられます。



西塔跡全景（上が北）

東階段（北東から）

基壇には凝灰岩の切石を用いた「壇上積」という最上級の外装が行われています。ほとんどの場所で切石は後世に持ち去られており、「地覆石」と「延石」しか残っていませんでした。

西塔所用の軒瓦

東塔跡の発掘調査

基壇外装は延石やその据付痕跡が確認でき、西側でも凸状に張り出す階段部分が確認できました。基壇南辺から北辺までを測ると約21mになり、基壇の一辺の長さは西塔と同じであることがわかりました。

西階段（西南から）

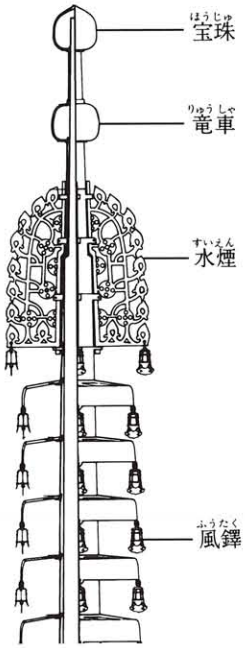
石敷（南から）

拳大の石を敷き詰めた「参道」と考えられる石敷遺構。

西塔跡出土の金銅製品

水煙

塔の相輪につく火炎を模した飾りです。これまで出土している他の水煙と比べても意匠は独特なものがあり、大安寺が当時の寺院のなかでも特別な存在であったことを窺わせます。



相輪（部分）模式図

（『日本の美術 No.158 塔の建築』より作成）

【風鐸】

塔など瓦葺きの建物の軒隅や相輪に吊るす大きな風鈴のような飾り具です。

相輪に吊り下げられたとみられる風鐸と風招

風鐸 1

風鐸は高さ約30cmの大きさです。風招は風鐸の下に吊り下げ、風を受ける部分です。風招が風で揺れると風鐸の内部にある「舌」とよばれる金具が風鐸と接し、荘厳な金属音を奏でます。

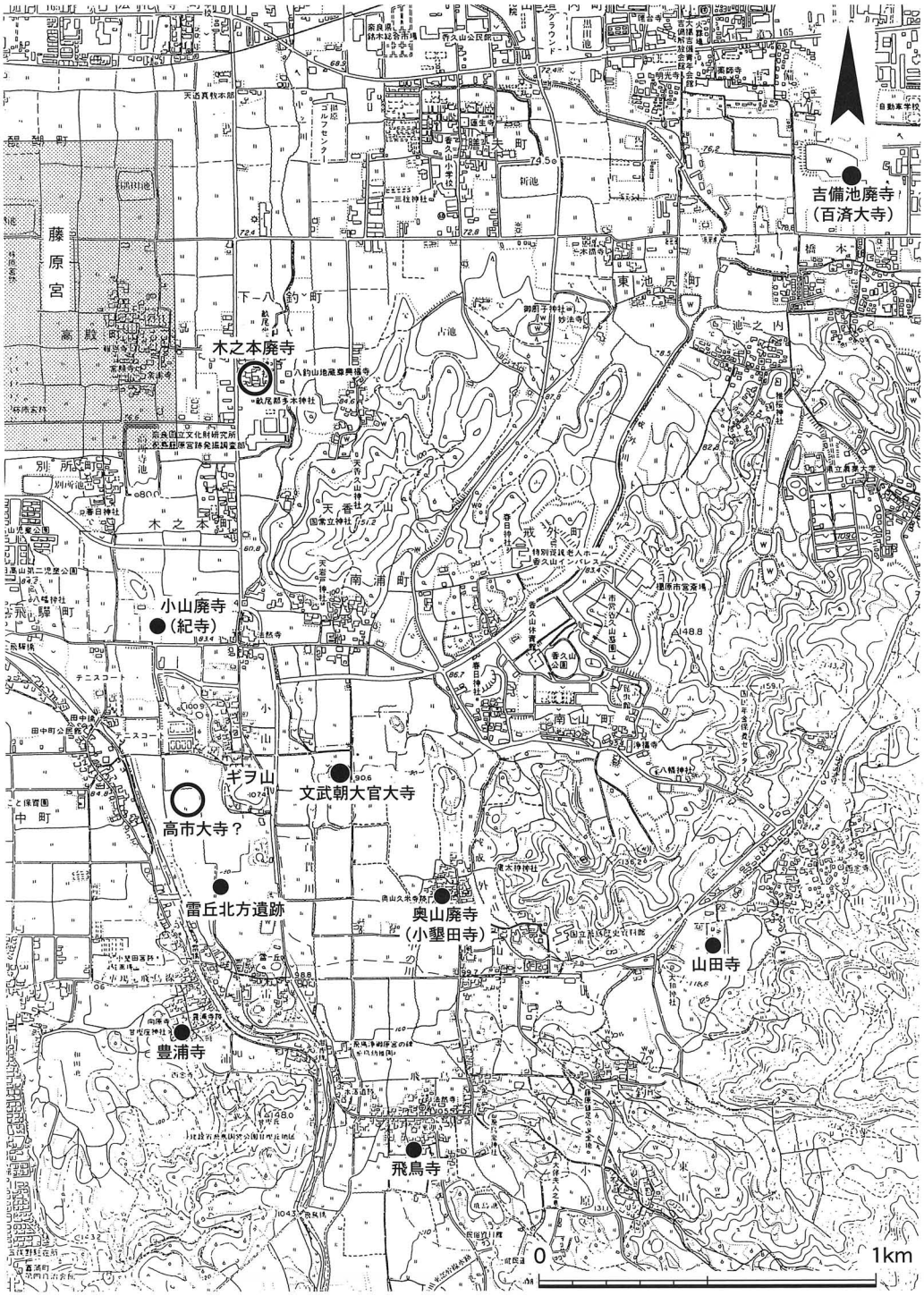
風鐸 2

高さ約45～55cmに復原でき、全国で出土している復原可能な風鐸としては最大の大きさです。表面に「袈裟襷文」とよばれる帯状の文様が施されています。

薬師寺西塔軒隅と風鐸

軒隅に吊り下げられたとみられる風鐸

■　百済大寺から大安寺へ

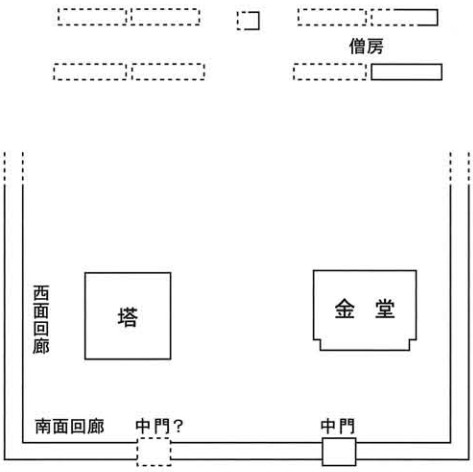


吉備池廃寺・文武朝大官大寺と周辺の寺院（1/20,000）
（『吉備池廃寺発掘調査報告』より作成）

百済大寺

百済大寺

舒明11（639）年、舒明天皇の詔により、大寺（百済大寺）と大宮（百済大宮）の建設が始まります。百済大寺は天皇の発願による最初の寺院です。百済大寺には九重塔が建てられていたことが史料にみえますが、古代に九重塔が建てられていたと考えられる寺院は百済大寺とその系譜をひく大官大寺だけです。



吉備池廃寺伽藍配置

吉備池廃寺

吉備池廃寺塔跡全景（北から）
写真提供：奈良文化財研究所

百済大寺の所在地については、これまで諸説がありましたが、平成９（1997）年から桜井市吉備で行われた吉備池の発掘調査で巨大な寺院跡（吉備池廃寺）が発掘され、検出した遺構の規模や出土した瓦の特徴などから、この吉備池廃寺が百済大寺であることはほぼ確実とみられています。塔基壇は一辺約32mと同時期の寺跡をはるかに凌いでいます。

吉備池廃寺から出土した瓦は、軒瓦だけでなく、丸瓦や平瓦も飛鳥時代の他の寺院を凌ぐ大型品です。

吉備池廃寺出土軒丸瓦
写真提供：奈良文化財研究所

高市大寺

天武2（673）年、百済大寺は、百済から高市の地へ移されることとなりました。高市の地に移したことから高市大寺とよばれていましたが、『大安寺伽藍縁起 并 流記資財帳』には天武6（677）年に寺号を大官大寺に改めたとあります。寺の造営は百済大寺から建物や資材を移したと考えられています。高市大寺の所在地についてはいくつかの候補地があげられているものの、いまだ定説がありません。

木之本廃寺出土軒丸瓦
写真提供：奈良文化財研究所

【木之本廃寺説】橿原市木之本町で行われた発掘調査で出土している瓦の中には吉備池廃寺と同じ笵型で造られたものがあります。寺院の遺構はみつかっていませんが、大量の瓦が出土し、附近に寺があったと考えられています。瓦の製作技法等が変わらないことから吉備池廃寺の瓦が木之本廃寺に運ばれてきたと考えられています。これらのことから、木之本廃寺を高市大寺の有力な候補とみる考え方もあります。

【ギヲ山西方説】文武朝大官大寺の西方、ギヲ山を越えた飛鳥川に近い一帯からは文武朝大官大寺と同じ笵型でつくられた軒瓦や平城京の大安寺と共通する瓦がみつかっています。この近辺から大安寺へ瓦が運ばれたことは確実とみられます。いまだ発掘調査は行われていませんが、今後の調査に期待されます。

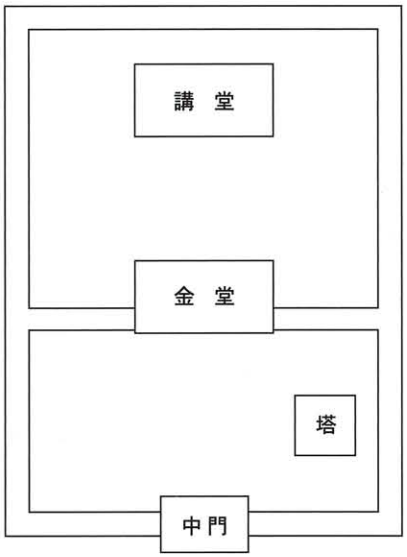
文武朝大官大寺

文武朝大官大寺は、藤原京四大寺（大官大寺、川原寺、飛鳥寺、本薬師寺）の筆頭の位置を占めた寺院です。壮大な伽藍に九重塔が建てられていたとされています。

発掘調査の結果、中軸線上に南から中門、金堂、講堂が並び、金堂の前方東側に塔があることがわかりました。

調査で検出した堂塔のほとんどが焼失した痕跡を残していました。金堂と講堂は完成後に、塔は基壇工事途中で、中門や回廊は建築中に焼けていることがわかりました。

大官大寺塔・東面回廊調査地全景（東から）
写真提供：奈良文化財研究所



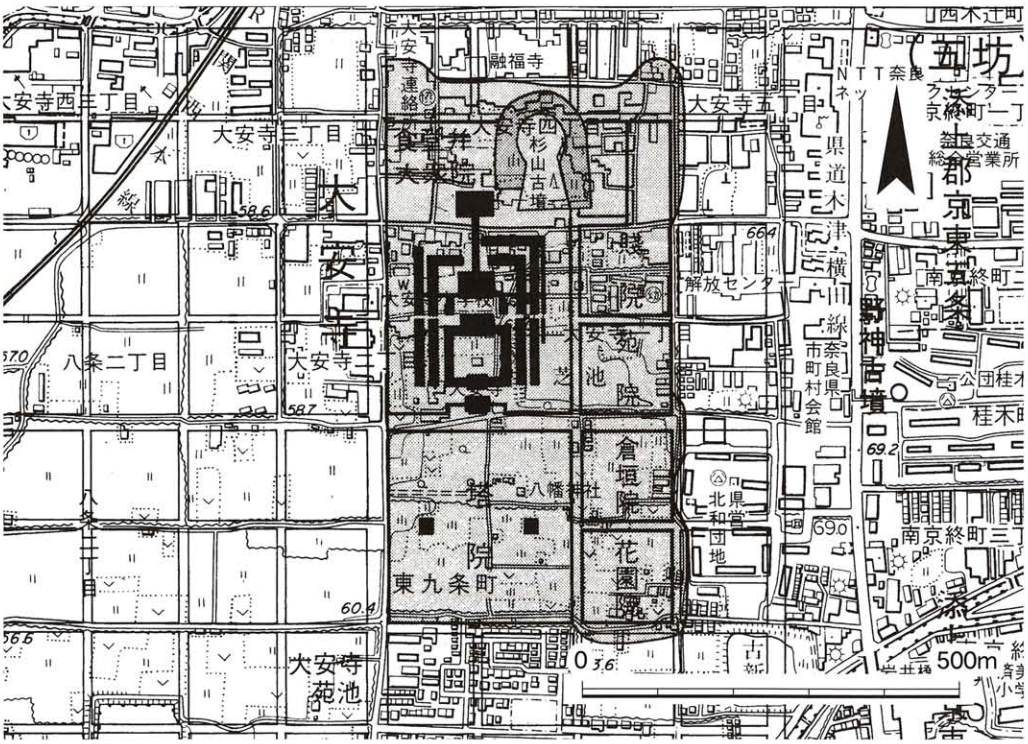
大官大寺伽藍配置

中軸線上に南から中門、金堂、講堂が並び、金堂の前方東側に塔が置かれます。金堂前方西側に塔を建てる計画があったのか否かは議論をよぶところです。

大官大寺式軒瓦（大安寺旧境内出土）

軒瓦は非常に大ぶりで、初めて左右対称に唐草紋（からくさもん）を配置した軒平瓦などの意匠も独特なものがあります。また、平城京大安寺からも大官大寺式の瓦が出土しており、文武朝大官大寺から大安寺へ瓦が運ばれていることがわかります。

大安寺



史跡大安寺旧境内位置図（1/10,000）

大安寺で特徴的な瓦には牛の頭のような中心飾り、左右に連続する唐草紋をもつ軒平瓦があります。

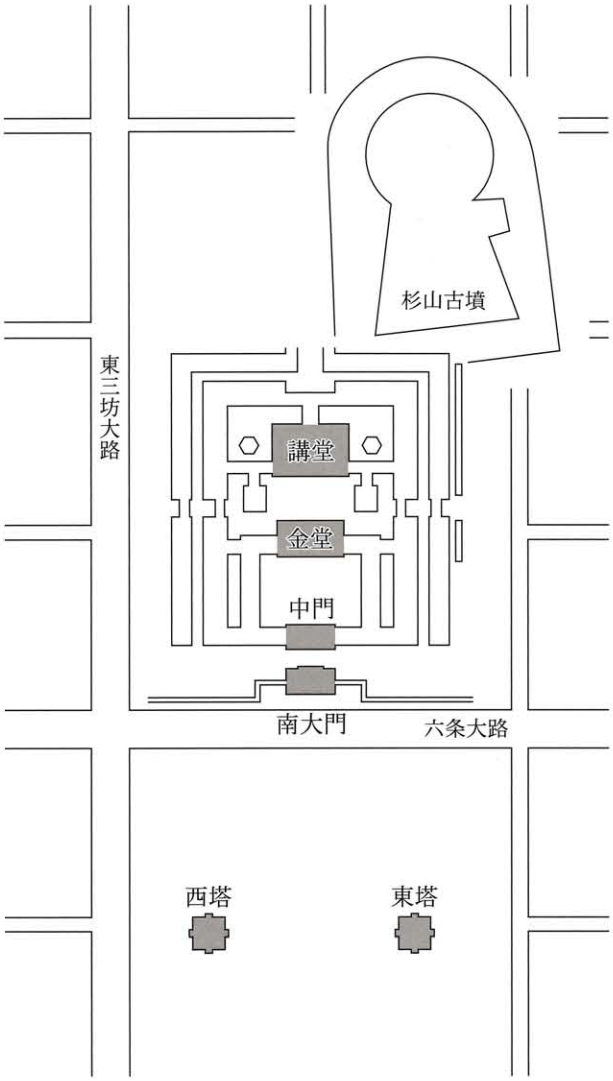
大安寺式軒瓦

大安寺旧境内から出土する軒瓦の種類は多く、平城宮で用いられた瓦と同じ笵型でつくられた軒瓦もみられます。

平城宮系軒瓦

大安寺旧境内からは凸面（とつめん）に布目（ぬのめ）のある平瓦が出土します。この瓦は飛鳥地域の雷丘（いかずちのおか）周辺から出土する瓦とよく似ており、そこから運ばれてきたと考えられます。これらの瓦は藤原京や大官大寺より古い天武（てんむ）朝（672～686）頃の製品とみられ、大安寺の前身寺院がこの地にあったことを窺わせ、高市大寺との関係を考える手がかりになりそうです。

凸面布目平瓦



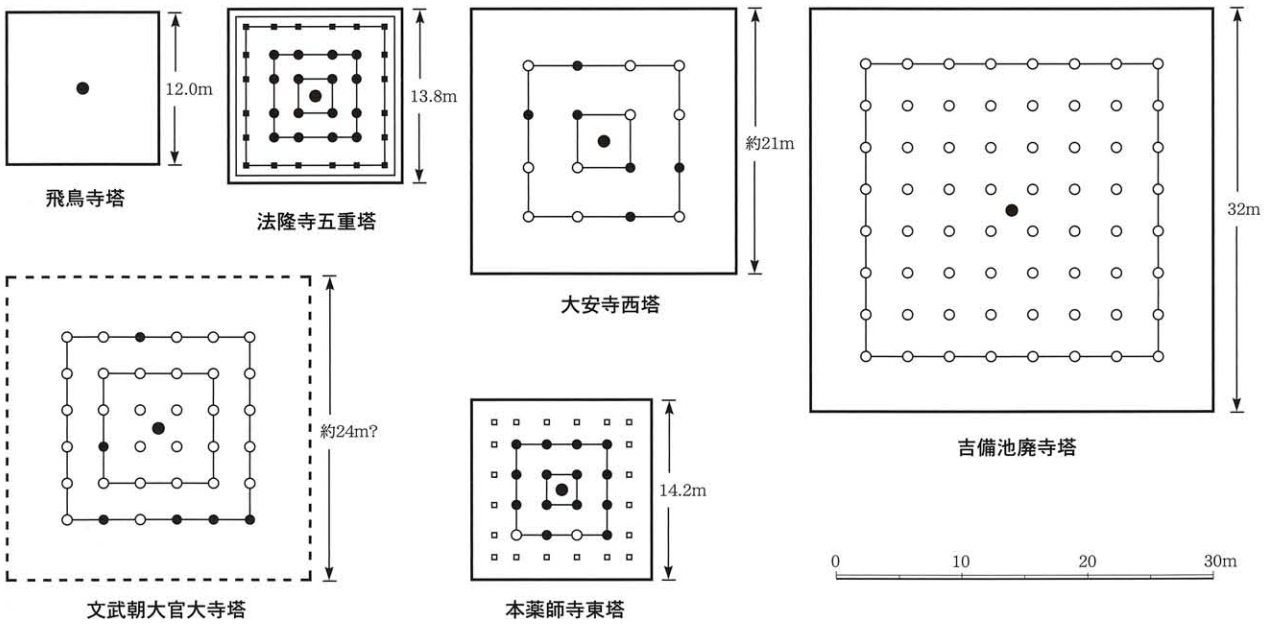
大安寺伽藍配置

和銅（わどう）3（710）年、都が平城京に遷（うつ）されたのに伴い、大官大寺も平城京へ移されました。

大安寺の伽藍の様子は『資財帳』（747年勘録（かんろく））に詳しく記されており、その時点で南大門、中門、金堂、講堂等があったことがわかりますが、塔の記述がありません。

大安寺では、二つの塔が伽藍中心部の南側に塔院として独立し、史料からは七重塔が建っていたことが窺え、それまでの寺院とは異なった特徴が多くみられます。

軒先を飾った三彩垂木先瓦



塔の平面規模の比較（『吉備池廃寺発掘調査報告』より作成　1/600）

■　史跡大安寺旧境内の発掘調査から

大安寺に取り込まれていた杉山古墳の前方部前面は、大安寺造営に際して大きく削り取られており、その斜面を利用して瓦を焼くための瓦窯（大安寺杉山瓦窯）が築かれています。

窯は6基みつかっており、窯内や瓦を棄てた土坑などからは窯の壁材や焼け損じた奈良時代や平安時代以降の瓦が出土しています。大安寺は平安時代以降も建物の建て替えや火災による復興が行われており、そういった際に杉山瓦窯で焼かれた瓦が使われたものと考えられます。

奈良時代の軒丸瓦

平安時代の軒丸瓦

奈良時代の軒平瓦

平安時代の軒平瓦

平瓦、道具瓦、日干煉瓦

南大門の発掘調査で土を固めて造った塑像が出土しました。『資財帳』に「塼四天王像二具在南中門／右天平十四歳次壬午寺奉造」とあり、「塼」は塑像を指しますので、出土した塑像はこの記載にみえる奈良時代の塑像の可能性が考えられます。

塑像　右：立像の腕部
**　　左：邪鬼の頭髪部**

西太房（僧房）出土白磁椀

僧房の調査で中国製の青磁や白磁、愛知（猿投窯）、京都産の緑釉・灰釉陶器が出土しました。

西太房出土白磁、青磁、緑釉、灰釉陶器

大安寺略年表

西暦	年号	出来事
617	推古25	聖徳太子、熊凝に精舎を建てる。『略記』
639	舒明11	百済川の側に精舎を移し、百済大寺を建てる。『略記』
642	皇極1	百済大寺建立の詔。『書記』
673	天武2	造高市大寺司を任ず。『書記』
		寺を百済川畔より高市に移す『資財帳』
677	天武6	高市大寺を改めて大官大寺と号す。『資財帳』
699	文武3	九重塔を建て、丈六像をつくる。『略記』
702	大宝2	造大安寺司を任ず。『続紀』
710	和銅3	大官大寺を平城京に移す。『略記』
711	和銅4	藤原宮並びに大官大寺焼く。『略記』
716	霊亀2	元興寺を左京六条四坊に移し建てる。『続紀』
729	天平1	聖武天皇、道慈に大官大寺を移造させる。『略記』
742	天平12	大官大寺造営成る。『大安寺縁起』
745	天平17	大官大寺を改め大安寺とする。『略記』
747	天平19	『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』勘録。
766	天平神護2	東塔に落雷。『続紀』
767	神護景雲1	称徳天皇行幸し、造寺工軽間鳥麿を外従五位下に叙す。『続紀』
782	延暦1	光仁天皇の一周忌を大安寺で行う。『続紀』
784	延暦3	長岡京遷都。『続紀』
790	延暦9	高野新笠（桓武天皇生母）の一周忌を大安寺で行う。『続紀』
794	延暦13	平安京遷都。『紀略』
805	延暦24	国中の諸寺塔を修理させる。『続紀』
806	大同1	桓武天皇の五七斎を大安寺・秋篠寺で行う。『後紀』
859	貞観1	唐院建立。『唐院記』
876	貞観18	塔、震動する。『日本三代実録』
911	延喜11	講堂・三面僧房が焼失。『一代要記』
949	天暦3	雷火により西塔が焼失。『紀略』
989	永祚1	大風により塔の露盤が落ちる。『東大寺要録』
1017	寛仁1	大安寺焼失。塔一基、釈迦如来像一体のみ免れる。『紀略』他
1041	長久2	大安寺焼失。『略記』
1090	寛治4	この頃までに七重宝塔ほか、金堂等修造なる。『京都御所東山御文庫記録』
1204	元久1	七重宝塔修理の勧進。『春華秋月抄』
1260	文応1	この頃までに別当宗性、塔を修理。『法勝寺御八講問答記』紙背文書
1296	永仁4	東塔、雷火により焼失。『和漢春秋暦』

文献　書記＝日本書紀　続紀＝続日本紀　後紀＝日本後紀　紀略＝日本紀略
略記＝扶桑略記　資財帳＝大安寺伽藍縁起并流記資財帳

平成19年度 秋季特別展【第25回 平城京展】

並びたつ大塔 ―大安寺塔跡の発掘調査―

平成19年11月5日　発行

編集　奈良市埋蔵文化財調査センター

発行　奈良市教育委員会